

香川県詩史

笹本 正 樹

風光明媚な讃岐の国は、古来、柿本人麿呂をはじめ多くの歌人たちによって歌われてきた。しかし、香川からでた現代詩人はそれ程多くはない。代表的なところをひとり挙げると壺井繁治であろうか。

ここでは「詩」について、どのような現代詩人があらわれたかを、史的にとりあげてみたいと思う。

先ず、かわった宗教詩人とも言うべき阿野赤鳥がいる。彼は庵治村の村長であった。是空会という集まりをもち、芸術や宗教を語った。次に壺井繁治がいる。小豆島の寒村からでたこの熱血漢は上京して、マルキシズムの思想家として活躍したことは、よく知られている。そして戦病死した観音寺の森川義信である。彼は二三歳にして、ビルマの戦場で散っていった。のち、彼の才能を惜しんで鮎川信夫が詩集を編んでいる。尾崎徳はソ満国境守備隊として、戦場の危機をいくたびも乗りこえて帰国した。敗戦後、実存在的な詩を書いた。さらに、孤高を保って、英国翻訳詩に力を入れ、独自の詩境を開いた生活哲学詩

人ともいふべき衣更着信がいる。彼は中桐雅夫、鮎川信夫、田村隆一などと若い頃から交流があった。いま、三本松の海辺の静かな環境にあって、第五詩集を準備している。

歌謡や校歌を四百もつくった詩人に、河西新太郎がいる。服部良一の「オリーブの歌」はよく知られている。国鉄詩人ともいふべき人に、田中恭一郎がいる。彼は「四国詩人」を主宰し、画廊を経営した。最後の赤山勇は、壺井繁治のつくった「詩人会議」に属して、反体制の長詩をつくっている。(なお、ここでは取りあげなかったが、十国修の「詩研究」も貴重な歴史をつみ重ねている。)

一、阿野赤鳥の詩

阿部義一(阿野赤鳥)は明治三十年に木田郡庵治村に生まれている。高松商業高校を卒業して、家業の醤油製造業についた。大正九年頃から青少年を集めて、芸術や宗教について語り、是空会を創設した。

大正十四年、前田鉄之助の詩洋社同人となる。昭和三年「寂光流転」を詩洋社から発刊した。昭和二年から二六年まで庵治村長を務めた。昭和四七年、七三歳で没した。

「小鳥の如く」

無心に歌ふことだ

朗らかな天日の下であそぶ小鳥のやうに

何にも思はないでただ心のままに歌ふことだ

理屈を考へてはいけない

理屈はすぐひからびた概念に

みづみづしい情感を閉ぢこめようとする

をさなごのやうに虚心であれ

流れのやうにすなほであれ

ああすきとほったやうなきよらかなひかりが

次第に遠くから訪れてくるやうなよろこび

このよろこびを愛せよ

片時でもいい 此の片時は

永遠とびったり溶け合っているものだ。

「牛」

やかましく何か罵られながら

鞭をもつて

激しく打ちたたかれたが

或日はごくろうと優しく言はれた

夕暮牛は秣を食ひ乍ら

カサコソと鳴るその音に耳を澄ました

小暗い牛小屋で牛は寂しくかんじた

もうと啼いて見たが

寂として誰もかへり見ては呉れなかった

もし世に

じぶんと同じやうな牛が

草のゆたかな

野原で放たれ

明るい太陽に照らされて一緒に遊べたなら

どんなに愉快だろうと思つて見た

たうてい叶はない夢のやうな空想だとあきらめた

夜はだんだんと暗く

牛は草のうへに

大きなからだを独りで横たへて

さてしづかに瞳を瞑った

前田鉄之助は「邪光流転」の序で、次のように述べている。

「私は近頃、阿野君程誠実熱烈な人を見ない。詩も亦人である故に私にとって未見の人でありながら、己に一生の知己の如き感のある此の詩人となり、いつも其の詩と書翰を透して描きつつ懐しんで居る次第である。

をがんでゆくことだ

山を海を 野を

ああ その聖浄を見よ

をがんで暮らすことだ

人を 鳥を 獣を

と君は歌った。あらゆるものに合掌して行かうとする謙虚な至純な
気持、これこそ阿野君を、その詩を最も雄弁に語ってゐるものである
う。⁽¹⁾

阿野赤鳥は学生の頃、川路柳虹の「現代詩歌」によって詩の道に入
ることになった。詩人よりも宗教家といった方がよいのかも知れない。
自然を肯定して、純粹な魂をもつことに心がけようとした人である。

二、壺井繁治の詩

壺井家の祖父は大阪河内地方の出身である。壺井繁治は明治三十年、
小豆島苗羽村堀越に生まれた。彼の家は村で一番手広く耕作をしてい
た。上京、早稲田大学英文科に学ぶ。友人に萩原恭次郎、岡本潤がい
て思想的に影響を受ける。なお同級生に、横光利一、井伏鱒二、中山
義秀、吉田一穂などがいて、文学表現活動に情熱をそそぐことになっ
た。

彼は前衛詩誌「赤と黒」を創刊、アナキズムの立場をとったが、暴
漢に襲われて、アナキストの群から離れた。その後、マルキシズムの
立場に移って、無産者芸術連盟に入り、プロレタリア詩人の地位をえ
た。

戦後は新日本文学会の創立に参加し、また「新日本詩人」「詩人会
議」の詩運動に情熱を注いだ。昭和五十年に逝去した。妻が、壺井栄
であることはよく知られている。

「石」

石は

億万年を

黙って

暮らしつづけた

その間に

空は

晴れたり

曇ったりした

「秋」

秋は冷たい寶石のかけら

きらきら光ながら

わたしの胸へころげこむ

秋は透明な心の鏡

そっとのぞいてみると

わたしの涙と微笑を映す

秋はわたしの白い柩

ひそかに地中に埋めてみると

傍で虫がちろちろと泣く

「二月二十日」

— 小林多喜二のお母さんへ —

小林さんのお母さん

あなたの息子が殺されてから十二年たちました

あなたの息子が警察につかまって

二四時間とたたぬうちに殺されたことを知ったとき

僕は牢屋に繋がれていました

あなたの息子がどんな死に方をしたか

あなたの息子がどんな殺され方をしたか

僕はそれを詳しく知りたかったのに

ある日、面会に来た妻が

立会看守の目をぬすんでちらっと見せた紙切れで

「コバヤシコロサレタ」

ただそれだけのことを知ったきりです

お母さん

あなたはどんな思いでその知らせを受取りましたか

恐らくあなたは地獄そのものをじかに抱かされた思いをなされた

ことでしょう

僕でさえその知らせを受けて独房に帰ったとき

自分の胸に大きな穴をあけられたほどの痛手を負いました

その穴を埋めるため

お母さん

僕の全身の血は煮えくりかえりました

(後略)

「蝶」

あの標本室には

私の死骸が並んでいる

たくさんの仲間と共に

ピンで止められて

喪章の如く静かに

それなのに

あの痩せて光った昆虫学者は

首をひねり

考えこんでいる

ときどきわたしの翅が

微かに動くので

こいつ

まだ死にきれぬのか

太い野郎だ

それとも

風のせいかな

そういつて

昆虫学者はぴしゃりと窓を閉めた

ああ わたしは

最早生きものではございませぬ

単に一羽の標本の蝶にすぎません

それでも

そんなに固く窓を閉められると

息詰まってしまいます

わたしの謔言に驚いて

妻は起き

静かに窓を開け放った

外は

花の咲いたように

明るい夜だった

あまりの明るさに

泣けて来た

壺井繁治の詩業は、日本のプロレタリア運動の渦の中できつられたので、彼の死後、詩のみならず全著作物がまとめられることになった。青磁社から全六巻として厚い「壺井繁治全集」が平成元年に出版された。ソビエトの崩壊後、こうした活動家の記録は一層重要なものとなっている。彼の詩業は、次のようにまとめられる。

「出発」前後 (一九一九―二二)

「赤と黒」時代 (一九二三―二四)

「赤と黒」以後 (一九二四―二七)

「ナップ」以後 (一九三三―三七)

戦時下 (一九三八―四五)

米軍占領下 (一九四五―五一)

安保闘争前後 (一九五二―五九)

「詩人会議」時代 (一九六三―六九)

一九七〇年以後 (一九七〇―七五)

金子光晴は壺井繁治の詩の業績について、次のように述べている。

「ほぼ、半世紀近くにわたって、特に勤労大衆の詩の方向づけに壺井君の仕事が一つの目標となり、その役割がどんなに大きなものであったかということについて否定しようとする者は、誰もいないだろう：プロレタリア詩の、大船の竜骨を形造ってきた功績をにないうる詩人は、壺井君の他に、岡本潤、小野十三郎、中野重治と、わずかに指を屈することができるだけだ」⁽²⁾

小豆郡の南端より、先ず壺井繁治がでたことで、黒島伝治、壺井栄が、文学史上に登場することになった。とくに妻の栄は繁治の投獄中に、佐多稲子、宮本百合子、平林たい子、林芙美子などとの交流によって、作家の地位を築いたのであった。小豆島が全国的に有名になるのは栄

の「二十四の瞳」によってであるが、その引き金は繁治にあったとも言えよう。この映画のヒットによって、香川県も全国に知られる度合がつよくなったのである。

三、森川義信の詩

森川義信は大正七年一月一日に、三豊郡粟井村本庄に生まれた。三豊中学校を卒業し、早稲田第二高等学院の英文科に入学した。二年あまりで中退している。

詩をつくるのは中学生の頃からであり、最初は、鈴しのぶのペンネームで、萩原朔太郎ばりの詩をつくっている。のち「LUNA」に入り、山川章と改名した。「早稲田派」「荒地」などに詩を発表している。やがて、本名で詩を書き、故郷に帰って丸亀歩兵連隊に入隊した。昭和一七年八月一三日に、ビルマのミートキーナで戦病死している。二三歳であった。多くの詩友たちから、その天才的な能力の十分に開花しないうちの死が惜しまれた。親友の鮎川信夫は彼の詩を編んだ。(昭和五六年)今は定本「増補、森川義信詩集」が国文社よりでている。⁽³⁾

「冬」

花の咲かない樹があった

樹の下には小鳥の死んでゐる鳥籠が
鳥籠の揺れる窓は

ひらく日もなく 硝子は曇ってゐた

「雨の出発」

背中の寒暖計に泪がたまる

影もないドアをすぎて

古びた時間はまだ叩いてゐる

あれは樹液の言葉でもない

背中の川を声だけで帰ってゆくものたち

「習作」

1

テラアスにちかい海の日

アメシストの鏡から水もながれる

だから頬をみかけぼくのアリサ

葉ざくらのかげでお前は青い花だ

2

ハアプがながれてゐる月夜

葡萄の木陰はフォルマリンの匂いがいっぱい

歌のやうにぬれたところを

こほろぎがくすぐりはじめる

「眠り」

骨を折る音

その音のなかに

流れる水は乾き

鶯色の風はおちて

石に濡れた額は傾くままに眠った

みえない推移の重さに

骨を折る音

その音のなかに

「勾配」

非望のきはみ

非望のいのち

はげしく一つのものに向かって

誰がこの階段をおりていったか

時空をこえて屹立する地平をのぞんで

そこに立てば

かきむしるやうに悲風はつんざき

季節はすでに終りであった

たかだかと欲望の精神に

はたして時は

噴水の花を象眼して

光彩の地平をもちあげたか

純粹なものばかりを打ちくだいて

なにゆえにここまで来たのか

だかみよ

きびしく勾配に根をささへ

ふとした流れの凹みから雑草のかけから

いくつもの道ははじまってゐるのだ

衣更着信は戦前の中学生時代を回想して、次のように述べている。

「毎号早熟な詩が掲載される生徒がいた。その名は森川義信——後年

早大へ進んで「荒地」の前身である「ルナ」や「ル・パン」などの詩

誌に作品を発表し「衝にて」や「勾配」のような絶品を残して、ビル

マで戦没した詩人である。「荒地」の仲間たちは、軍隊にはいった者

はそれぞれ奇蹟的に生還し、内地に残った者は例外なく(当地は疾病

の一つであった)肺患にかかりながらも死なずにすんだ。ひとり森川

義信だけが帰り来ることがなく、太平洋戦争における詩壇最大の損失と嘆かれているのである」⁽⁴⁾

二歳下で親友であった鮎川信夫は、のちに「死んだ男」で、森川を次のように吊っている。

埋葬の日は、言葉もなく

立会う者もなかった

憤慨も、悲哀も、不幸の柔弱な様子もなかった

空に向かって眼をあげ

きみはただ重たい靴のなかに足をつっこんで静かに横たわったの

だ。

「さよなら、太陽も海も信ずるに足りない」

Mよ、地下に眠るMよ、

きみの胸の傷口は今でもまだ痛むか。

また、鮎川は、「アメリカ」という長詩でも三回にわたって、森川に

語りかけている。その最初のところを挙げると、次のようである。⁽⁵⁾

Mよ 君は暗い約束に従い

重たい軍靴と薬品の匂いを残し

この世から姿を消してしまったのだ

死ぬことからとりのこされた僕たちのうえに

君のなやましい顔の痕跡をとどめて

なぜ灰と炎が君を滅ぼす一切であったのか？

鮎川信夫は、森川義信の詩を自己の出発点、いわばゼロの地点として、戦後を出発したのあった。その詩信の基点は、親友森川義信にあって、戦後を消えることにはなかつた。

「森川は、がっしりした体格に似合わない、蒼白繊細な顔立ちの美青年だったが、寡黙なおとなしい性格の人で、めったに積極的な意見を述べるといふようなことはなかつた。：時代の状況に照せば、それも《コップの中の嵐》にすぎないのである。あたたら天才をコップの中で死なせてしまったとかすかな思いは、生き残った我々の胸からおそらく永久に消えることはないであろう」⁽⁶⁾

詩人、森川義信は観音寺市の最南の粟井の出身で、現代詩に重要な位置を占めている。だが、香川県ではあまり知られていない。彼の兄弟には医者が多い。現在の森川医院にはその実妹がいる。

四、尾崎徳の詩

大川郡白鳥町伊座に大正一〇年、尾崎徳（めぐむ）は生まれた。赤

穂浪士が住みついたとも言われるところである。父は町議会議員であつた。

森川義信（大正七年生まれ）、衣更着信（大正九年生まれ）の影響を受けて、詩作に熱中した。父のすすめで、上海憲兵隊の軍属となつて、中国大陸に渡つた。のち、現地教育を受けるため、ソ満国境守備隊の関東軍に加わつて、負傷している。終戦で招集解除されて、同郷の桑島玄二（後大阪芸術大学教授）と同人誌を創刊したりした。

二五歳のとき北園克衛主宰の「VOU」に参加した。昭和二八年、高松市公民館において高松詩話会をはじめ、河西新太郎、十国修、さきいおり、などと世話人となつた。のち、香川県庁総務部公聴広報課に勤務した。昭和五十年五月、高松市民病院で死去した。時に五八歳であつた。

「嵐ある構図」

塹壕に

涙腺のようなみぞれが降つた

垢まみれの兵士たちは

ふと

郷愁をみぞれに埋めた

炸裂する血しぶきに
するどい歌を感じた

夜景は墨絵でなく

それは 氷河期の

虚像のかなたにあった

灼熱した鏡をいだき

兵士たちは

夜空をうつ思念の稲妻に

咆哮した

混迷した感覚の底に

冷然と雄叫びする

はがねのひびきを聴いた

天の意欲のままに

カンバスは

あくどい原色にぬりかえよ

音立てて凍結する闇夜を切って

故国での

清冽な突風がかすめた

「風葬」

ひねもす

しろい石柩をめぐり

しずかな風が吹いていた

むなしい悔をとぎす

虚無の怒りから

海ちかい疎林の

遠いつめたさのあたり

シャベルの先で

砂は こわれやすい骨のように鳴り

「敗北」

かたむく夜の壁をつたわり

かなしむ擬砲を射ちあって のがれた

不吉の

また 放心の

アキレス腱は切られ

がくりとくずれかかる

私のトルソ

わずかに淫らなあなたのむくろに

めまいを支える

新しいスフィンクスよ

たえまない嘆嗟の影に

もはや

身構える何があるうか

けだるく明滅する義眼をとざし

いまは ただ

気の弱い猟犬のようにあなたを咬む

ひかるつめたい耳朶を

神に洗う胸乳のみ 白く

言葉はもつれ

ふたりは立ちつくす

食歯動物のように

むなしく

彼の親友である桑島玄二は「尾崎徳全詩集」昭和五五年、の序文
〔美の確信〕で、次のように述べている。⁽⁷⁾

「尾崎徳がいた世の中は、かってない大きな戦争を引き起こし、ま
た国破れたあとの〈戦後〉というものを持った。……もういちど〈戦
後〉の初心にかえてみる必要がある。そのため尾崎徳は軍服すがた
の自分を多くうたった。…この詩集は鉄片のように、目立たずとも存
在を重く主張し、触れば焼けつくような告発の詩集である。そのた
めのヒューマニズムの精神である。生命の記録である」⁽⁸⁾

桑島玄二は尾崎徳と従兄弟であった。彼は尾崎徳や衣更着信につい
て、次のように述べている。

「海の風が吹く小さな町で、送られてくる詩誌を、二人してむさぼ
るように読んだ。そのなかには、「荒地」派のルーツともいふべき、
中桐雅夫編集の「LUNA」もあった。「LUNA」を創刊時から知っ
ているのは、いま何人いるだろうと、彼と二十年ぶりで会ったときに
語りあったものだ。「LUNA」の詩人たちが、みごと戦後詩の役割
を果たしているのを、当時わがことのようによろこびあった。競いの

気持ちもかくさなかったことを、ついこの間のようにして思い出す。徳がいつもながしがっていた衣更着信は、お酒を飲まないが、中桐雅夫の方はあなたに輪をかけるほどに飲んで、なお元気ですよ。もう少し生きるべきであった。」⁽⁹⁾

大川郡の三本松中学校（今は高等学校）は戦後、南原繁東京大学総長を生んだ。更に、詩人、衣更着信、尾崎徳、桑島玄二などの文化を推進する人物を出しているのである。

五、衣更着信の詩

鎌田進、すなわち衣更着信は、大正九年二月生まれである。最初、如月信のペンネームを使ったのが、のちに衣更着信とした。これは平家物語に「きさらぎ」を、「衣更着」としてあったので、改名したということである。大川郡三本松中学校を卒業して、上京、明治大学に入学、昭和二十一年、結婚している。戦後、三本松高等学校で英語の教師をした。五十歳まで勤務し、のち翻訳に専念している。

東京での学生時代は、中桐雅夫の「ルナクラブ」に所属し、森川義信、牧野虚太郎、田村隆一、鮎川信夫、北村太郎、三好豊一郎など、現代の一流詩人たちと交流を深めた。昭和四三年「衣更着信詩集」を思潮社から出版し、「孤独な泳ぎ手」を昭和五十一年、「庚申その他の詩」を昭和五八年に季節社より出版している。なお、平成六年第四詩集、

「モグニズムの絵」を思潮社より出した。詩集以外にも、詩や小説の翻訳も手がけている。⁽¹⁰⁾

その詩風はどちらかというと、暗く孤独な生活哲学とでもいえる。ただ、英米の詩を翻訳しているうちに、海外の詩のよいところを取り入れているので、その行間の比喩はいぶし銀のように卓越している。

「墓場の木」

墓場に生えた木は

なにを養いにするのだろうか

砂のなかへ深く根を入れても

そこに満ちているのは死

石のあいだに根冠を挿して

非情の陶器の膚に触れると

愕然として伸長の方向を変えるのであろう

それが死を流さない生の態度だ

甕と小石の土のなかに根を張り

なにかを養分として

魚鱗のような樹皮の裂け目に

峻烈なおいを放つ脂をたらし

墓石に心を冷やす揺れる影を落して

悔恨のこけをつちかいながら

墓場に生えた木は

わたしのこどもの時よりもはるかに高くなっている

「とびうおの歌」

うねりの下にうねりよりも青く生きていた線條のような柔らかな

骨はプランクトンと潮が作るしなやかな肉ぐるみになった

撃ちこまれた鉛のようにはやく沈んだ

しぶきをあげて悲しいかもめの啼き声を拒否した

胸びれにはげしく風をはらんで

危険な空気のなかにしばらくとどまった

星にはつづかぬ旅 紡錘形のけなげな不幸

白いぬれた胸に叫びをつめて

燃えつきる蠟燭のように横腹にきらめく太陽

追われ追われて追われることに

つきとおされた嘘のように慣れっこになっていた

死んだとき血も脂肪もなかった

「浜で」

水際からほんの少し引き上げられただけで砂のうえで舟はすっか

り元気を失う

だが心配することはないんだよ、魚のように

おまえは乾いて死にはしない

「旅路」

浮かなくなった水死人

底に着いた水死人

水中を渡る音は

泡の頂きの波の山の

下を通って旅をする

もぐらのめぐらの四分五裂の

旅を手さぐりで

出会うのは目や鼻に

痛い塩の味

なめられる舌つつかれる耳

藻を引き寄せて

横たわる

彼の訳詩集「人生摘要」では、英米の詩人の作品を紹介している。

その中でも、W・C ウィリアムズを好きだという。ウィリアムズ（一九八三―六三）は米国ニュージャーシー生まれの医師である。最もアメリカ的なシーンをアメリカの話し言葉で、表現したいといわれている。現代詩人に多大な影響を与えた人である。では、衣更着信訳「ばあさんの目をさませるために」を次に紹介しておこう。

年が寄るってのは

一群の小さな

ちいちいさえづる鳥たちが

裸の木を

かすめて

まぶしい雪のうえを

とんでるようだね。

舞い上がり舞落ちして

もてあそばれる、

暗い風に――

でも、なんだろう？

ざらざらした草の茎に

鳥たちはもうとまっちゃってるし、

雪

のうえにはいちめん

裂けた草の実の

さやが散り

風はやわらげられているよ、

かん高い

豊かな鳴き声で。¹¹¹

平成六年、三月二二日、衣更着信邸を訪れた私は、氏より処女詩集

「衣更着信詩集」と訳詩集「生産摘要」とをいただいた。年譜をつくりたかった私はいろいろと尋ねたが、年譜なく生きることこそ、詩人らしいとのことであるようだった。謙虚な詩人らしさに、好感がもてた。なお現代詩文庫八九巻に「衣更着信詩集」思潮社、が入っている。

六、河西信太郎の詩

大正時代の福田正夫などの民衆詩に共鳴して上京した河西新太郎は明治四五年、高松に生まれ、東洋大学を卒業している昭和十二年「亜欧連絡大飛行声援歌」に応募して、みごと第一等となった。戦後は「日本詩人」を毎年発行し、平成三年、逝去した。(同年七月、私は敬弔講演として「河西新太郎の詩と民衆愛」をホテル・リッチで話した。)著書としては「河西新太郎詩集」(昭和詩大学) 宝文館、昭五二、「作詩集・長い道」日本詩人社、昭五二などがある。¹⁰⁾

「金比羅」

むかし 東京の下宿屋で

四国から出て来たばかりの少年と

風呂たきの婆さんが話していた

四国って 大阪よりも遠いのかという

大阪のずっと西だと答えると

それでは 九州と どっちが遠いかと聞く

金もなく友もなく 二人はいい話相手だったろう

それでも 四国への渡し船は毎日あるとか

電灯がついているのかなどと聞かれると少年は 顔を赤らめて当

惑した

四国のどこだというので

讃岐の高松と答えると なあーんだという顔で

金比羅さんのあるところだね といわれ

少年のほうに驚いてしまった

婆さんは 家から金比羅さんが見えるかという

気の弱い少年は 見えると嘘をついてしまった

死ぬまでにはぜひお参りしたいと

口癖のようにいっていた婆さん

夏休みを終へて少年が東京へ帰るとき

婆さんへ土産の金比羅飴を持って帰ったが

ひまを出されて もう下宿屋にはいなかった

金比羅飴を見ると 今でも僕はすこし悲しくなる

「吸い殻の町」

火のついた煙草が

燃えつくし灰になって崩れ落ちる

あの無残な終末のように

老年は 知らぬまにやってくる

病院でも 公園のベンチでも

捨てられた煙草の吸い殻が見苦しく

陽にひからび

雨にぬれ

若いアベックの靴に踏まれて

きたなく散らばり

ほこりとなって風に舞い

やがて町じゅうに拡がってゆくように

老人社会がやってくる

新しい煙草に火をつけた

青春のあとときめきは

かぐわしく燃えた赤い火の情熱は

いまは遠い日の夢か

この町も あの町も

燃えつきた青春の脱殻のように

吸い殻だけの町になってゆく

それでいいのか

それでいいのか

そんな叫び声をあげているうちに

わたしひとり 灰になってゆくだろう

河西新太郎は朝日新聞募集歌詞審査員をし、西沢爽プロ専属作詞家でもあった。そのためラジオ・コマースの宣伝歌や流行歌、校歌など、四〇〇歌あまりを作っている。

「オリーブの歌」

夢も楽しい そよ風に

みどり明るいオリーブの

えだがさやさや ゆれている

ああ恋を知り 恋に泣く

島の乙女の 胸のように

いつかあなたと あの丘で

姿やさしい オリーブの

銀の葉かげに 頬よせて

ああこぼれ咲き こぼれ散る

白い花びら 数えたね

瀬戸の岬に 南欧の

海を偲へば オリーブの

実る葉風が 君を呼ぶ

ああ青い空 青い波

小豆島山 忘れらりよか

作曲は服部良一、唄は二葉あき子でコロムビアレコードに吹き込まれた。氏の代表作といえよう。今でも小豆島にいくと、バスでこの歌を聞くことができる。

また、次の歌は県下の小学校において愛唱されていて、もう誰が作ったものかもすっかりわすれられている。

「信号赤なら」

信号赤なら とまります

兔のおめめと ならめっこ

青になったら 手をあげて

子鹿はさっさと わたります

踏切いったん 立ちどまる

子鹿も子牛も おりこうね

みちであそんで しかられて

めえめえ小山羊は 鳴いています

お猿は道路に とびだして

ころんでおしりは まっかっか

だけど子鹿は ゆび三本

いつでもかならず とまります

象さん熊さん パンダちゃん

仲よし子よしで 一列に

みんな右がわ あるきます

子鹿も元気に あるきます

河西新太郎は民衆詩の影響を受け、「百万人の詩を書こう」と提唱したが、詩は平明すぎて魅力にとぼしく、むしろこうした歌謡の方に
おいて、その実力を発揮した。高松高校、香川大学付属中学校などの

校歌も彼の作詞によるものである。

七、田中恭一郎の詩

田中恭一、ペンネーム田中恭一勞は、大正十二年に丸亀に生まれた。

詩集に「四国山脈」「讃岐山脈」「瀬戸内海」「わが天界の川」などがある。高橋新吉、田村昌由に師事し、昭和二八年より四国詩人界を設立した。日本現代詩人会、日本未来派同人であった。平成六年二月九日逝去した。六九歳である。

「ちいさな駅は侘びて」

いくつかの窪地をこえて石段を昇りつめると

ちいさな駅へ

寒椿の咲く冬日の駅へ

いつも

朝一番の汽車に 寺の坊さんが降りた

いくつかのだんだら坂の

石段を背にして

祈りをこめて雨のある寺へむかう

ちいさな駅から

侘びた禅寺へ

枯れた竹林のある 門には

鳥たちがふるえる

風はちぢこまる

ちいさな駅が

侘びた寺のなかにあるようにみえるのだ

だから

眼にみえないものに

伏している僕の想像力が

侘びた寺へ祈りを捧げる

侘びた沈黙が

やがてちいさな駅を包む

窪地の雲は生きて

ちいさな駅の

ちいさな改札口の

前の道を斜めにながれ

侘びた寺へ

「ツクツクシと蒸気機関車」

ツクツクシの奇兵隊は

青銅の鐘を打つ

ゆれるツクツクシのひびき

C 51形式機のまわりのツクツクシの風音

C 58形式機の下に咲くツクツクシの雨音

ツクツクシの衝動

歴史の存在

スギナの王子の歴史

鉄橋の下の

ながれる筏に

ツクツクシとC 51機関車の純愛が

白い祈りをささげる

ゆれる愛の扉

溢れる蒸気の氾濫

生きるために

追憶の旋回を

ある歴史のために

いまローカル線は

ふたつの愛を無視して

天体に向かって旅立とうとしている

「私はあいかわらず四国の風土を取材した抒情詩と対話している。

詩を作る者の根源的な使命のように、私は風土に密着した詩を書きつけてきたのである。それは地方に住んでいる詩人の偏重のようにとられるかもしれないが、しかし地方に住んでいる者しか書けない特技でもあるように私は信じている」⁴³

彼は「わが天界の川」の「あとがき」でこのように記している。四国詩人会では、多くの詩を書く人々を育てた。国鉄、八幡勤務のときに、高橋新吉の詩碑が建った。その後、高橋新吉のもとをよく訪れている。

われなく備なく一切の世界なし 新吉

この短冊を、私は四国詩人会で「北原白秋」について語った時に、氏より記念としていただいた。それを今も書齋に飾ってある。

八、赤山勇の詩

一九三六年、高松市に生まれた赤山勇は全電通詩人集団、詩人会議に所属し、坂出電報電話局に勤務している。

詩集に「血債の地方」思潮社、「リマ海域」秋津書店、「人質」群鳥新社、「アウツシユビットトレイン」詩人会議、「空洞伝説」視点社、などがある。⁴⁴

「人真」

奪われたらどうする

あなたの眼から

ひそかにではない

白昼堂々と

奪われるとしたら

引きちぎられたらどうする

あなたの耳から

ひそかにではない

白昼堂々と

引きちぎられるとしたら

連れていかれたらどうする

あなたのぬくもりから

ひそかにではなく

白昼堂々と

連れていかれるとしたら

殺されたらどうする

あなたから

ひそかにではない

白昼堂々と

殺されるとしたら

「変身」

最初にきづいたのは

尻穴が風にさらされているのに

恥ずかしいなどと思わなかったことだ

それでもまた

確定的ではなかったが

アスファルトにじゅるじゅる

足どころか手までも

直かに痛いのだ

つまりよつんばいなのだ

そういうえびきのう

近ごろめっきりおもくなった

ぼくのなかの大人っぽい重石を

とりのけるために
冒険ともいうべく

僕の装飾を売ったはずだ

するとやっぱり

この毛深いやつは

ぼく自体なのだろうか

汚物をさらけだしても

紙つかう秩序もしいられず

飢えのためには自由なく

よろこんでかみくだいてしまふ

じゆうほんぼう

すばらしいことではないか

つながれることが

生理になっている

この類でやっつ

ときはなたれた完成のむこうを

うすぎたない

よつんばいのぼくが

誇りにみちてとらえたというのだ

水落博は「空洞伝説」のパンフレットで次のように述べている。

「赤山勇は『血債の地方』で新居浜住友の中国人労働者強制連行問題を、『リマ海峡』で米原潜演習海域の問題を、『人質』で高松空襲を、『アウシュビットレイン』で、広島・アウシュビッツの虐殺を、それぞれ現代詩集として書下し、少年の日の戦争の恐怖の記憶を核に告発しつつってきた。この間、ほぼ二十年の歳月を要している」⁵⁵⁾

赤山勇の詩は反戦的で、しかも長詩が多い。詩人会議に入って活躍しているところからも、いわば壺井繁治のもっていた思想性を継承していると言える。そうした意味で、県下では貴重な存在の詩人である。

結 語

香川県詩史ということで、香川県の詩人をとりあげ、その作品を紹介してみた。壺井繁治をのぞくと、あまり知られていない。

ただ、日本全体の詩史からみると、森川義信と衣更着信が位置づけられてよいのではないかと思う。森川義信はもっと研究されてよいし、衣更着信の詩とともに、その交友関係は、戦後の日本詩史の出発の重要なポイントをなしている。衣更着信は「現代詩手帳」思潮社（平成

六年三月号より)に、「ルナクラブの人たち」を連載しているのを、参考になる。第一回目は牧野虚太郎、第二回目は森川義信である。¹⁰⁾

香川は詩人の少ない土地柄である。そのため香川詩史といっても、戦前の代表として壺井繁治、戦後の代表として衣更着信をあげるのみである。今後、これを追う人々がどのようにあらわれるのであろうか。たとえば赤山勇は壺井繁治の系流をふんでいる。さらに、森川義信の原流を汲んで花咲かせる人々を期待したい。

註

- (1) 阿野赤鳥「寂光流転」、詩洋社、昭三、三一―四頁
- (2) 「壺井繁治詩集」、飯塚書店、昭四七、一八一頁
- (3) 鮎川信夫編「増補・森川義信詩集」、国文社、平三
- (4) 衣更着信「LUNAとその周辺」、季節社、平三
- (5) 現代の詩人(第三卷)「鮎川信夫」、中央公論、昭五九、二五―六頁
- (6) 「増補・森川義信詩集」、九十頁
- (7) 「尾崎徳全詩集」、発行人、岡田ツルエ、制作者、永田敏之、昭五

五

- (8) 前掲書、六頁(美の確信)

(9) 前掲書、七頁(美の確信)

(10) 衣更着信訳「人生摘要―英米現代詩集」季節社、パット・マガ―著「被害者を探せ」、早川書房、昭五八

(11) 衣更着信訳「人生摘要」、八七―八頁

(12) 「河西新太郎詩集」(昭和詩大系)、宝文館、昭五二、河西新太郎「作詩集・長い道」、日本詩人社、昭五二、これらの二著に河西新太郎の作品はほぼ収められている。ただ、校歌は未収録が大部分である。

(13) 田中恭一郎「詩集・わが天界の川」、四国詩人会、昭四六、一四三頁

(14) 赤山勇詩集「血債の地方」、思潮社、昭四一、「リマ海峡」、秋津書店、昭四六、「人質」、郡島新社、昭五二、「アウシュビットレイン」、詩人会議、昭六十

(15) 「空洞伝説」には含まれた、諸家の推奨文の一つである。

(16) 「現代詩手帖」、思潮社、平成六年三月号、一六二―三頁(新連載・ルナクラブの人たち)

〈この研究は平成六年度文部省特別研究費による成果である。〉

Modern Poem History of the Kagawa Prefecture

Masaki Sasamoto

In this essay, I introduced and explained some representative poets in the Kagawa prefecture. I introduced about Akatori Ano, Sigeji Tsuboi, Yosinobu Morikawa, Megumu Ozaki, Sin Kisaragi, Sintarou Kawanisi, Kyoutirou Tanaka, Isamu Akayama, A special superior poet is Yosinobu Morikawa. After the World War II, he gave many influences on the poem of Japan.

高松短期大学研究紀要

第 26 号

平成8年3月22日 印刷
平成8年3月22日 発行

編集発行 高松短期大学
〒761-01 高松市春日町960番地
TEL(0878)41-3255
FAX(0878)41-3064

印刷 高東印刷株式会社
高松市東山崎町596番地